



からしだね

2019年8・9月号
(552号)

キリストの受難 カトリック池田教会

主任：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/>



本号の記事の主題など

ノノイ・プラザ神父の巻頭言
教皇回勅「もっとも恵み豊かな神」
(also in English)
2019年度北摂地区大会
「霊の光を受けて さあ 出かけよう」
大人の日曜学校だより 6月30日
お知らせ 北摂地区「映画鑑賞」と
「連続信仰講座」

みんなの談話室
モールの中の教会
矢上清夫さんの思い出
池田教会・日生中央教会 合同黙想会
「共に支え、共に生きる」を主題にして
短歌二首
年間カレンダーに追加された行事予定など

巻頭言

教皇回勅 Munificentissimus Deus (「ムニフィチェンティシムス・デウス」)

ノイ・プラザ神父

夏、八月から九月にかけて、もういちど聖母マリアをめぐるカトリックの大事な教えをふりかえってみましょう。多くの方がおわかりでしょうが、わたしたちカトリックはマリアさまを愛しています。実際たったこの二ヶ月だけでも、典礼では三度もマリアさまを祝いますが、そのなかで8月15日の被昇天記念日をもっとも大きなお祝いになってますね。でも9月8日のマリアさま誕生日、それに9月15日に御受難会だけがお祝いする「わたしたちの哀しみの聖母マリア」だって重要なお祝いの日だと考えられています。カトリックの信仰にあっては聖母マリアはいつも特別の地位を与えられているのです。

でも、哀しみの聖母のお祭りもマリアさまの誕生日も日曜日にあたっています。つまり今年はこのふたつのお祝いはともに主日のミサ典礼に道を譲りながら守られることとなります。日曜日は主の安息日ですから、典礼のお祝いのなかにあってはいばんの優先権を与えられているのです。

うえに書いた不思議な響きをもつ言葉、Munificentissimus Deus (ムニフィチェンティシムス・デウス)、に戻ると、ほんとうはこの二語のラテン語(日本語に訳すと「もっとも恵み豊かな神」という意味になりますよ)は1950年11月1日に教皇ピウス12世が記(しる)した書簡にあたえられた公式タイトルなのです。この手紙で教皇は全カトリック世界にあてて新たな教義を宣言しました。

教皇回勅Munificentissimus Deus (「もっとも恵み豊かな神」)は全カトリックが聖母マリアの被昇天を信じるよう勧めました。信仰と道徳をめぐる問題について教皇回勅が断固として教えるとき、それは無謬(むびゆう=間違いがない)であるとカトリック教会は信頼していますから、聖母マリアが身も心も天に「あげられた」といまま公言するのです。この回勅から正確な言葉を使ってみると、こんなことを言ってますよ。

われらの主イエス・キリスト、使徒聖ペテロとパウロ、それにわれ自身の権威によってわれらは無原罪の神の母、聖母マリアがこの世における生を成就したのち、身も心も天上の栄光へと委ねられたことを神によって啓示された教義であると宣言布告、規定するものである。

この回勅は第一回ヴァチカン公会議(1869～

70)で教皇無謬性をめぐる最初の規定がなされたのち、はじめてくださった、したがってまことに厳粛な聖座宣言であるとされます。この宣言において、いわゆる「教皇の無謬性」教義をローマ教皇自身が引きあいに出したからです。教皇のこの無謬性はイエスがペテロにおこなった「約束」に基づきます—つまり教会の最高司牧者としてペテロが至上の使徒的権威によって、信仰と道徳にかんしてある教義を全教会がしたがうべきであると決めるとき、ペテロと彼の後継者たちには誤りを犯させない、というペテロにあたえた約束です。

積年にわたるおびただしい歴史的・神学的伝統を調べ、マリアが長きにわたるキリスト教的伝統のなかでどのように大切にされてきたかを配慮し、さらに世界中の司教たちと協議を重ねたのち、教皇ピウス12世は「もっとも恵み豊かな神」を布告したのです。この回勅は評判となって司教たちからほとんど全員一致にちかい支持を集めたとか。

マリアさまの被昇天をめぐる透明で断定的回勅を下すことに価値があるか、となかには疑問をもった人もいたのは確かです。マリアさまをめぐるあらたな教義に反対することは、そのひとがかならずしも反マリアだ、ということではないでしょう。そうではない。そういう人が反対するのは、マリアさまが身も心も天にあげられていった、そのことじゃない。むしろ教皇が教義化することに反対なのだ、とわたし自身は思う。カトリック教会は信者が配慮すべき教義を、いわばじゅうぶんすぎるほどつくってきたわけですからね。

マリアさまの被昇天教義が個々のカトリック信者にとってどんな風に大事なの、と思う人もあるでしょう。この回勅の42番目のながいパラグラフを参照させてください。というのも、ここでピウス12世は「もっとも恵み豊かな神」の狙いを語ってくれているから。おわりのほうで、こう言ってます—

重大な問題がおきるたび、これほど寄りすがつてきた聖母マリアの特別の保護のもとに聖職者をゆだねてきたわれら、典礼にあっては聖母マリアに全人類を捧げてきたわれら、これまでなんどもマリアさまの力強い加護を経験してきたわれら、そのわれらは確信する—被昇天をめぐるこの厳粛な布告と規定とがおおいに人類に貢献するこ

とを、なぜなら回勅は聖母が無二の絆によって結ばれているあの聖三位一体の栄光に寄与するからである。

願わくば、信仰あるすべての者が奮い立って天の母にたいしっそう敬虔で、キリストの名を誇りとする者の魂がイエスキリストの体にあやかり、教会というこの威厳ある体のすべてのメンバーに母親らしい心を示してくださる聖母への愛を強めるように。またマリアさまが与えてくれる栄光あふれるお手本を瞑想する人たちが、天の父の意思を実行にうつし、人に善をもたらすことに捧げ尽くされた人間の生活にこそ、価値があることをいっそう確信することを。

いっばうで物質主義の本物をよそおった偽善の教えと、そうした教えからうまれる道徳の退廃が善のあかりを消し、ひとびとのあいだに不一致をかきたてて彼らの命を破滅させそうになるとき、すばらしい被昇天の教えによって、自分たちの肉

体と魂がいかに高尚な目的へとむかっているかをすべてのひとが明快に理解できよう。最後にのぞむのは、聖母マリアの被昇天を信じることで、自分自身の復活への信念がさらに強まり、より効果あふれるものとなることである。

(引用がおわり)

教皇回勅「もつとも恵み豊かな神」が教えてくれるのは、聖母マリアはわたしたちに希望を吹き込んでくれるということです。主にたいして忠実な生活をすごした聖母は、そのことで人類の輝くお手本となりました。聖母被昇天によって、神は愛する幼子たる私たちすべてに、聖母とおなじようなことをお考えいただいている、というのがわかる。最後に、ねがわくば聖母マリアの被昇天を黙想するわたしたちが、神とひとつになることが最終的な運命たる人類家族に自分たちすべてが属することを悟らせてくれますように。聖母マリアはその道をわたしたちに教えられたのです。

(The heading article) Munificentissimus Deus

Fr. Nonoy Plasa

During these summer months of August and September, let us take a look once again at an important Catholic teaching on Mary.

As many of you probably observe, we Catholics are Marian loving people. In fact, within this span of barely two summer months, our liturgy honors Mary three times. August 15's Assumption being the biggest of the three.

But the birthday of Mary on September 8th as well as the uniquely Passionist feast on Mary, Our Lady of Sorrows, on September 15 are also considered important feasts. Mother Mary always has a special place in our Catholic Christian faith.

However, Mary's birthday as well as her feast as our Lady of Sorrows, fall on Sundays. Because of this, they are not observed this year as they give way to the primacy of Sunday liturgy. Sunday, being the Lord's Day, usually gets the top priority among the list of liturgical celebrations.

Going back now to those strange-sounding words written above, actually, these two Latin words (which in English is translated as "the most bountiful God"), is the official title of an Apostolic Letter written by Pope Pius XII in November 1, 1950. In it, the Pope announced to the whole Catholic world a new dogma.

Munificentissimus Deus exhorted all Catholics to believe in the Assumption of Mary. Trusting that it cannot fall into error when it definitely teaches matters concerning faith and morals, the Church professes the truth that Mary "went up" to heaven body and soul. To use the exact words from the said document, it says:

" By the authority of our Lord Jesus Christ, of the Blessed Apostles Peter and Paul, and by our own authority, we pronounce, declare, and define it to be a divinely revealed dogma: that the Immaculate Mother of God, the ever Virgin Mary, having completed the course of her earthly life, was assumed body and soul into heavenly glory " (#44).

This was said to be the first “ex-cathedra” (‘from the chair [of Peter]) and therefore a very solemn declaration since the official ruling on papal infallibility was made at the First Vatican Council almost a hundred years before (1869–1870). Here, the Pope himself, invoked the so-called doctrine on “Papal Infallibility.” This infallibility is grounded in Jesus’ promise to Peter to protect him (and his successors) from error when as the chief Shepherd of the Church and in virtue of his supreme apostolic authority, he defines a doctrine concerning faith or morals to be held by the whole Church.

Going through the wealth of historical and theological traditions through the ages and taking notes on how Mary has been venerated through centuries of Christian traditions, and after consulting all the bishops all over the world, Pope Pius XII then issued *Munificentissimus Deus*. It reportedly gained popularity and even garnered near unanimous support from the bishops.

Some did question the value of making a clear and definitive proclamation on Mary's Assumption. Was it really necessary? To object to this new dogma on Mary didn't necessarily mean that such persons were anti Marian. No. I think what they were objecting to was not the belief that Mary did go up to heaven, body and soul itself. Rather, its so-called dogmatization. The Catholic Church has more than enough dogma to take into consideration so to speak.

Perhaps one may ask, what's the importance of this doctrine to the life of individual Catholic? For this, let me refer you to the lengthy paragraph number 42 of this document. For here, Pope Pius XII did give us what he hoped *Munificentissimus Deus* could achieve. Toward the end of this Apostolic Letter he said:

“ We, who have placed our pontificate under the special patronage of the most

holy Virgin, to whom we have had recourse so often in times of grave trouble, we who have consecrated the entire human race to her Immaculate Heart in public ceremonies, and who have time and time again experienced her powerful protection, are confident that this solemn proclamation and definition of the Assumption will contribute in no small way to the advantage of human society, since it redounds to the glory of the Most Blessed Trinity, to which the Blessed Mother of God is bound by such singular bonds.

It is to be hoped that all the faithful will be stirred up to a stronger piety toward their heavenly Mother, and that the souls of all those who glory in the Christian name may be moved by the desire of sharing in the unity of Jesus Christ's Mystical Body and of increasing their love for her who shows her motherly heart to all the members of this august body. And so we may hope that those who meditate upon the glorious example Mary offers us may be more and more convinced of the value of a human life entirely devoted to carrying out the heavenly Father's will and to bringing good to others.

Thus, while the illusory teachings of materialism and the corruption of morals that follows from these teachings threaten to extinguish the light of virtue and to ruin the lives of men by exciting discord among them, in this magnificent way all may see clearly to what a lofty goal our bodies and souls are destined. Finally it is our hope that belief in Mary's bodily Assumption into heaven will make our belief in our own resurrection stronger and render it more effective. ”

Munificentissimus Deus teaches that Mary should inspire us to hope. She lived a life faithful to the Lord and thus became a shining example to the human race. Her assumption signifies God's similar intention to all of us, his beloved children. Lastly, may our meditation on Mary's assumption lead us to a greater awareness that we all belong to one human family whose final destiny is to be with God. And Mary has shown us the way.

2019年度北摂地区大会

聖霊の光を受けて さあ、出かけよう



北摂地区大会を司式されたアベイヤ司教と共同司式司祭、そして41名の堅信の秘跡を受けた方々

隔年に開催される北摂地区大会が聖母被昇天学院聖堂で7月15日(海の日)に開かれた。ホセ・マリア・アベイヤ司教の司式による記念ミサは約五百名の会衆の参加で行われた。

記念ミサはアベイヤ司教による集会祈願で始まった。「聖なる父よ、信じる者の心に聖霊の光を注ぎ、教え導いて下さい。聖霊によってわたしたちが正しいことを志し、いつもその助けを受けることができますように。聖霊の交わりの中で、あなたともに世々に生き、支配しておられる御子、わたしたちの主イエス・キリストによって。」

次いで、聖書の朗読が次のようになされた。

第一朗読:イザヤ11・1~4(茨木教会受堅者)

第二朗読:使徒言行録13~8(箕面教会受堅者)
福音朗読:ルカ 10・21~24(清川泰司北摂地区長)。

説教において、アベイヤ司教は幼児洗礼後の家庭や教会で多くの人々に支えられて歩んだ受堅者を労い、これから現実の社会の中で主に向かい、聖霊に導かれて識別を行ってゆくように励ました。

堅信式に移り、司教からの洗礼の約束の更新のことばに41名がきっぱりと「はい」と応え、司教はイザヤ11・1~4から引用して次のように神へ祈った。

全能の神、主イエス・キリストの父よ、あなたは水と聖霊によって、この人々に新しいいのちを与え、罪から解放して下さいました。今、この人々の上に、助け主である聖霊を送り、知恵と理解、判断と勇気、神を知る恵み、神を愛し敬う心をお与え下さい。わたしたちの主イエス・キリストによって。

次いで、祭壇を取り囲む狭い空間に41名の受堅者が横一列に並び、アベイヤ司教が一人ひとりに接手を行った。代父母は受堅者の後方から彼らの肩に手を置き、受堅者は各教区の主任司祭に堅信名を記したカードを渡した。司祭はカードを受け取るとそれを司教に示し、司教に他の共同司式者も加わって41名の受堅者に塗油を施した。

この秘跡の様子を後方に座す会衆には目視することは困難であったが、各受堅者にとっては濃密な堅信の秘跡となった。

ミサ終盤、共同祈願の意向を宣べた受堅者の意向は次の通り。

「堅信を受けた僕たちが、ミサを大切にして積極的に与り、教会の一員として責任をもって行動してゆくことができますように。そして、北摂八教会の仲間のつながりで親睦を深めながら、共に歩んでゆくことができますように。」

退場した後に41名の受験者と司教と主任司祭などが並んだ集合写真撮影(前ページ)で北摂地区大会は終了した。その後、曇天下の聖堂前庭にて、堅信の秘跡を受けた3人とお祝いするノイ神父、中村神父、日生中央・池田の教会関係者を写真撮影。



大人の日曜学校だより 6月30日

「鋤(すき)に手をかけてから後ろを顧(かえり)みる者は、神の国にふさわしくない」 ルカ 9・51 - 62

鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない～これはこの日の福音朗読の箇所最後の一文です。この日の福音ははじめから、「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。」という、緊張感のある書き出しで始まっています。その中で、イエスは「わたしに従いなさい」そのように言われます。しかし、その答えとして「さきに父の埋葬を済まさせてください」とか、「家族に暇乞い(いとまごい)をさせてください」とか、何かと理由をつける者がいたため、イエスは「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない。」そう述べられたのです。

私たちが集まって福音を朗読していても、その言葉に「イエス様はどんな意図でこう言われたのだろう？」そう感じた方がいたようでした。おそらく、この言葉に何か冷たさを感じたのかもしれませんが。あるいは、あたかもわが家に入ろうとして、門戸を閉ざされたような気分になったのか…。イエスは折にふれ、聖書の中でご自分の弟子たちに向かってさえ、厳しい言葉を述べる場合があります。ただ、人の心理として、“自分が慕う相手から冷たくされると深く傷つく”ということがあるように、もしそんなふうを感じたとしたら、きっとそれはイエスを慕い求める心の裏返しに相違ありません。

私ごとで恐縮ですが、私の父は一介の商社マンでした。そのためか、私が子供の頃は仕事でストレスをため込んで、家で爆発させるという毎日で、本来なら慕い求めるはずの父からきつく当たられることが、私は嫌でたまりませんでした。ところがある日、ある人から「商社というのは、ものすごいストレスのかかる職業なんだよ」そう言われたことがありました。

けれども、そのことはすぐには“すどん”と私の胸に落ちることはなく、それから10年、20年と月日がたち、今度は自分自身が社会の様々なストレスに晒されるようになって初めて、その人に言われたことをしみじみと思い出すようになりました。そして、なぜ父がきつく厳しかったのかも、分かるような気がしました。その意味では、イエス様だってエルサレムに入られるという緊迫した場面で、物の言い方のひとつもきつくなることはあって不思議はないのでは…。そう私は思います。しかも、イエス様にはこの世を救い、人類の罪の贖(あがな)いを引き受けるという、私た

ちとは次元の異なる大役がありました。したがって、その神のご計画の中で自らを与え尽くさんとするイエスを慕う私たちが、ときに厳しい言葉を受けねばならないのは、それはむしろ大きな意味での神様の愛ととらえるべきかもしれません。

生きてると様々な困難に出遭います。時には何もかも嫌になることも。ですが、そんな時にはイエス様の苦難に思いをめぐらし、イエス様をお遣わしになった神の御心を胸に、イエスを信じ従って行きたいものです。

研修委員会

お知らせ

北摂地区「映画鑑賞」と 「連続信仰講座」

テーマ：聖母マリアと教会

映画「マリア」鑑賞会(各小教区で実施)

日時…8月25日(日)ミサ後

場所…池田教会カール記念館1階

映画「マリア」の上映時間は100分、2006年アメリカ映画。その希望の光は、ひとつの愛から生まれた。(映画「マリア」のポスターより)

連続信仰講座—全3回の講座タイトル、開催日(時刻は14時～16時)、開催場所、講師を順に記載。

第1回 「聖書における聖母マリア」、9月16日(月・祝)、池田教会、清川司祭。

第2回 「聖母マリアについて—教会の教えから—」、10月5日(土)、豊中教会、中野司祭。

第3回 「歴史の流れと現代社会にとっての聖母マリア」、10月14日(月・祝)、茨木教会、清川司祭。

・「連続信仰講座」です。できるだけ参加するようにしましょう。

・豊中教会と茨木教会へのアクセスは、各教会のホームページ等をご参照下さい。

・連続信仰講座の参加希望者は8月25日(日)までに研修委員会までお申し込み下さい。

北摂地区宣教評議会信徒奉仕職養成委員会

みんなの談話室 (四編の投稿)

モールの中の教会、グリーンベルト・チャペル
M.O.



フィリピンのマカティ市、緑の遊歩道を歩くとモダンな造りのグリーンベルトモールが建っている。その中にはフィピン、日本、中華等あらゆるレストランやカフェがあり、高級ブティックが軒を並べ、おしゃれな若者や家族で一杯である。

そのモールの中に教会が緑に囲まれドーム形で、真ん中に祭壇、それを囲むように信徒席があり、ベンチも壁も白で統一されている。

島上さんと私はアサンプション同窓生サミットに出席するためマニラに来ていた。そのとき偶然この教会のことを知って、ぜひ日曜日のミサに行きたいと思った。侍者をしているという現地の卒業生からの情報を得て、ミサの30分前に到着。

すぐにロザリオの祈りが始まった。周囲を見渡すと仕事前の人達が、熱心に祈っていた。若者達の中には仕事着のままの人達もいた、これから出勤するところだろうか。

自分の時間の許す範囲でちょっと立ち寄って祈ることができる教会がいつも身近にあることはどんなに素晴らしいことだろう。

日常生活の中で祈りがごく自然にこのような場所で、何気なくできるのはやはり信仰が生活の一部になっているためだろう。

7時15分、ミサが始まった。ほぼ満席、年齢層は広く、地元の人達や、旅行者の人達が、スクリーンを見つめ、一緒に英語で祈り、歌う。ミサは神聖な雰囲気であると同時に明るいテンポの良

い聖歌が歌われ、まるでミュージカルを見ているような楽しさを感じた。

天井はステンドグラス風、巨大な扇風機がシャンデリアのように何台も回り、オープンスペースなので、外からの風が入り、エアコンがなくても涼しく、快適な自然の中でのミサのようであった。

このミサに参加することで、身も心も浄化され日常生活のさまざまな問題に対処できるパワーをいただけるような気がする。

今年グリーンベルトチャペルは36年目を迎えるそうである。モットーは神の家に集いその一員として神を信頼し、本当の神の子になることだと記されていた。

矢上清夫さんの思い出

R.H.



聖書100週間のグループで、長くご一緒だった矢上さんが脚のお怪我で入院されてから退院後に復帰されるのを皆で待ちながら、奥様とお二人での生活も大変ということに介護の施設での生活を始められたと伺い、当時講座「聖書百週間」への復帰は難しいのかな…と皆残念な思いをいたしました。

聖書を読み合う間に聖書をそれて時々脱線することもあって、そんな時に伺ったお話ですが、日航機が御巢鷹山に墜落して500名余りの方たちが亡くなられた事故があった時、どういう事情だったかば覚えていませんが、とにかく羽田から伊丹へのキャンセル待ちをしていたけれど、遂に席がとれずあの便に乗れなかったのだとお聞きしたことがいまだに強烈に私の心に残っています。神さまが「まだまだやり残していることがある。もっと生きよ」と思われて搭乗のチャンスを取り上げられたのではないかと私なりに考えました。

この度のご葬儀に参列して、お孫さまたちにとり囲まれてのお幸せな老後を十分に楽しまれ、神さまのお呼びに答えて安心して旅立たれたのだと感じました。先に行かれた神父様方や皆さんたちとの楽しい宴を心から祈っております。

池田教会・日生中央教会 合同黙想会 指導者：沼野尚美先生

「共に支え、共に生きる」を主題として

毎年恒例の合同黙想会が、6月19日に宝塚黙想の家で行われました。今年は、病院チャプレン・カウンセラーとして活躍されている沼野尚美先生をお迎えして、主題「共に支え、共に生きる」のもとにお話をおうかがいしました。先生のお話も話術もすばらしく参加した34名ひとりひとりが自分だけへのメッセージを受け取ったと思いました。

ここに参加された5名の方が特にここに残ったことを書いてくださいましたので紹介させていただきますと思います。

Aさん

「共に支え、共に生きる」というテーマで話を聞き、わたしが心に残った事。

- ・「よろこぶ人と共によろこび、悲しみも共にする」こと、
- ・人のために祈るという事は神様から「愛と時間」をプレゼントされた私たちが、人の為により心を使い、その人の為によりそい、心にかけてということである、
- ・その時その時出来る事を精一杯すればよいということ。イエスさまの声を運べる人になれますようにと祈りながら！！

Bさん

神様は自然を通して聖書のことばを通して、人を通して、心のいやしを、やすらぎを与えてくださる。きずあとを強いやさしさにかえて生きる。

Cさん

私はいくつかのお話の中から印象に残っているのはK君のお話でした。彼は悪性脳腫瘍におかされ手術不可となり腫瘍が大きくなって死を待つだけという過酷な状況のなかにおられました。沼野さんとかかわりに於いて最初彼は「神さまなんかないよ」といきってどう対応したら良いかわからなかったそうです。そうこうしているうち彼は母がどんなに心配しているかに気づき、ケアにあたっている方々に対し少しずつ心を開いてこられました。一時危篤状態に陥ったとき死んでいても不思議がなかったとすれば今生きているのは自分の力ではなくて生かされているのだとし自ら洗礼を希望し病室で受洗されました。本当のしあわせは体が健康で手足が自由に動くことと定義されていますが、彼は「人間の本当の幸せとは心が自由であることだ。憎しみや妬み、怒りから心が解放されていること、

体の自由さよりも心の自由さの方が大切だと思うよ」といい切られたとのことでした。人の不幸を願うなさない自分すらも神さまはみすてずに愛して下さっている事をすなおに喜び、イエス様といっしょに生きる決心をしてから心の自由を得、自分がすなおに生きる事が楽になったと言いつづけ、旅立ったというお話でした。癒されて旅立ちたい私もこんな終生活を送れたらなど切望しお祈り致します。

Dさん

私たちを生かして下さる神様に、いつも感謝しながら、少しでも、みことばをよんで、覚えて、いきたいとおもった。子供たちと一緒に、みことばをおぼえていくことが、それを生きていくことが、自分たちの力になるんだなと思いました。

Eさん

前半の講義は沼野先生のチャプレンとしての体験を中心に語って頂きました。沼野先生と若くして不治の病で亡くなられた健ちゃんという患者さんのお話は感動と同時にとても深いお話でした。「何故、自分だけこんな目に会わなければいけないのだろう」と誰もが思う若くして死に向かう過酷な運命を背負った健ちゃんが沼野さんの寄添いとともに聖書の言葉を通じて神に心を開く事で苦しくつらいだけの人生が感謝と喜びの人生に変わっていくお話で、健ちゃんは病気が進行し死に向かっているにも関わらず病床で洗礼を受け信仰を持ったばかりでなく他の患者さん達に寄り添い励まされたそうです。彼が亡くなってから彼の看護をしていた方が彼の影響を受けて彼の死後信者になられたという事実からも彼の生き方と死に様は多くの人に感動と信仰を伝えるとても大切な役目を果たされたと思います。肉体的にはもはや希望を持ってない病気でも信仰と感謝の喜びがあれば、心の平安の内にいることが出来る事を教えて頂きました。以前読んだ若城希伊子さんの「十五歳の絶唱」という本を思い出しました。

今、日本では不治の病になって周りの人に迷惑を掛けるくらいなら死んだほうがマシという安楽死を肯定するような風潮が起きつつ有ります。この健ちゃんの生き方、死に様こそ安楽死と

対峙する素晴らしい命の尊さを重んじる生き方で、みならいたと思いました。これが安楽死に対する疑問の答えだと思いました。

後半は聖書の善きサマリア人を題材としてお話し頂きました。私達は人生においてどの道を進んでも良いという自由を与えられています。祭司の道、レビ人の道、サマリア人の道、どの道を進みますか?と自分に問われたように思いました。当然サマリア人の道を選びたいと思うわけですが、講義ではサマリア人の道を選んだ際の隣人の視点に立った大切なポイントについて教えて頂きました。また、タイタニック号に同乗していた宣教師が隣人に救命ボートを譲り暗い海に向かって泳ぎ出し命を落とされましたが、後にその隣人は立派な聖職者になられたというお話に心を打たれました。隣人を愛するとはどういう事なのか、沼野先生の経験から来る視点を通じて教えて頂きました。

最後に先生から頂いたアドバイスなのですが、ミサの中で主の平和の挨拶をする時はその場だけの笑顔を作るのではなく、挨拶をする方の一週間の平和を祈りながら心からの笑顔で挨拶をすることになりました。

沼野先生には、たくさんの著作があります。「生と死を抱きしめて — ホスピスのがん患者さんが教えてくれた生きる意味」「いのちと家族の絆 — がん家族のこころの風景」「癒されて旅立ちたい—ホスピスチャプレン物語」等々…機会があればお読みください。

研修委員会

カーテンが風に揺らるる窓辺にて
階下の少女のうたごえ聞こゆ

く
昏き川面に戻る夜のしずけさ

映りいし電車の去りてのち

パウロ

短歌二首

宝塚黙想の家から黙想会のお知らせ

■ 日帰り黙想会

8月はありません。

9月26日(木) 10:00 ~ 15:30

指導:山内十束神父

9月27日(金) 10:00 ~ 15:30

指導:山内十束神父

■ 週末黙想会

8月はありません。

9月28日(土) 17:00 ~ 29(日) 15:30

指導:山内十束神父、

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。 ☎0797(84) 3111



年間カレンダーに追加された行事予定 (9月30日まで)

8月24日(土) 10時より アルファ・コース同窓会

8月25日(日) ミサ後 映画「マリア」鑑賞会

9月5、12、19、26日(木) 10時半 ~

聖書百週間

9月13、27日(金) 14時~16時(予定)

福音書を学ぶ会

9月16日(月・祝) 14時~16時 連続信仰

講座の第1回「聖書における聖母マリア」

お知らせ アルファ・コース同窓会

本年受洗者の祝賀と映画「聖処女」の鑑賞

8月24日(土) 10時より、 会費1,000円。

どなたさまも是非参加お待ちしております。

福音宣教委員会 松下

8月のガラスケースのことば
求めなさい そうすれば与えられる

ルカ 11・9

9月のガラスケースのことば
だれでも高ぶる者は低くされ、
へりくだる者は高められる
ルカ 14・11

表紙の写真について

五島列島の福江島、三井楽にある淵ノ元カトリック墓碑群にて、フィルム撮影されたもの。デジタル撮影ではないので、夕日の海がやわらかな情景となった。1776年に外海の農民14家族78人が、禁教令を逃れてこの無人だった土地へ移り住んだと言われている。撮影者は石津和明氏。撮影日は2017年11月初旬。

編集後記

やっかいなのは隣人。いやだと思っても、お世話になることもあるから、お付き合いしないわけにはゆかない。できるなら波風立たせたくはないが。隣人もそう思っているが…現実には双方ガチで身動きとれない。大相撲だと水入り。

ところが肝心の行司がない。

最悪の日韓関係、親分のアメリカも見て見ぬふり。打つ手なし。泥沼化を予想せざるをえない。いつそ安倍さんと文さんがさしで杯傾けながららトップ会談で解決、というトランプ・スタイルはいかが？え、なんですって、酒がはいると日韓のトッポ同士が殴りあいになるって。はてはて…困りましたね。

直